The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	釜洞醇太郎先生を偲びて
Author(s)	川俣, 順一
Citation	癌と人. 1977, 5, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24177
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

釜洞醇太郎先生を偲びて

理事　川　俣　順　一*

本会理事長　釜洞醇太郎先生は去る４月13日心筋梗塞のため急逝されました。余りの突然の事に私達呆然自失の状態であります。御葬儀は４月14日大阪長居町の臨南寺会館で盛大に執り行われ，また先生の御遺徳を偲んで大阪大学主催の追悼会が５月26日大阪中之島の大阪大学講堂で各界の方々の参列のもとに催されました。

釜洞先生は明治44年２月23日大阪府にお生れになり，大阪府立住吉中学を経て旧制大阪高等学校に進まれ，昭和11年３月大阪帝国大学医学部御卒業，直ちに病理学教室において木下良順教授のもとで同教授の世界的に有名なバターイエローによるネズミの肝臓癌発生の研究に協力され癌研究の第一歩を踏み出されました。しかし同年12月から陸軍軍医として軍務に服されることになりました。折しも昭和12年から支那事変が始まりさらに昭和16年から大東亜戦争が始まったため，先生の軍隊勤務は終戦の翌昭和21年７月の召集解除にまで通算９年の長きに及びました。再び病理学教室における研究生活に戻られたあと，講師，助教授に進まれた先生は，昭和27年大阪大学微生物病研究所における感染症ことにウイルス病の病理学的研究の開拓のため特に乞われて同研究所に移られ，昭和28年教授に昇進，さらに昭和28年，感染病理学部門の新設と共にその部長に就任されました。昭和39年には新に腫瘍ウイルス部門が設けられましたのでその部長に移られました。微生物病研究所に移られた先生はいち早くウイルス感染の病理学的研究で世界的な業績を挙げられたのでありますが，その後腫瘍ウイルスの領域にも研究の輪を広げられ，また発癌性化学物質による癌発生にも深い関心を示され，４ＮＱＯという物質で正常培養細胞が試験管の中で癌細胞になるという劃期的な研究を発表されました。この研究で後に高松宮妃学術賞を受けられることになりました。

先生は御自身癌研究の道に精進されましたが，一方で癌に関する知識の普及に並々ならぬ努力を払われました。昭和38年朝日新聞に連載された「ガン物語」は難しい癌の研究を平易に説かれたものでこれはその後纒められて岩波新書の「ガン物語」として出版され多くの人に読まれ好評を博しております。また大阪大学の開放講座をはじめテレビ，ラジオを通じ或いはいろいろの会合で，あの独得の説得力のある，平易な話し方で，癌を防ぐにはどうしたらよいかということを熱心に話されるのを聞かれた方は少くないと思います。

先生は豪放磊落，よく物事の本質を見抜いて適切な判断を下されましたが一方，実に細やかな，やさしい心の持ち主でもありました。親孝行であることは有名であり，また御家族に対する深い愛情も知る人ぞ知るところでありました。先生は御父君から漢学の教養を受け継がれそれが先生の知的バックボーンを形成すると共に御母堂から佛教の深い信仰心を植え付けられそれは先生の精神的な支えになっていたように思われます。

---

* 大阪大学微生物病研究所長

先生はまた大へんな感激家でもありましたと申すより，先生の一生は感激の連続であったかも知れません。この感激家であられたということが或は先生の余りにも早かった死に関りが無かったとば申せないと思います。

先生には持病の糖尿病がありました。それにもかかわらず，昭和44年，当時全国的に吹き荒れていた大学紛争の嵐のさなか，全学の輿望を担って大阪大学の総長に当選された時，先生は御自身の健康を顧りみることなく敢然と引き受けられ，その後6年間全く我が身を忘れて大学の平静化に努められ，さらに大阪大学の発展のために尽力されました。

昭和50年任期満了で大学総長を退かれました先生はその後も本会の理事長としてはもちろん，大阪府，市をはじめ各方面の要職にあられ，昭和51年秋にはそれまでの御功績により紫授褒賞を受けられました。その間，お加減が悪くても委員会等にはステッキをついてでも出来る限り出席され責任を果して来られました。51年冬からは御気分の勝れぬ日が多くなりましたが，よもやこのようなことになろうとは我々も考えず，本会のためにも今後いろいろ御骨折りいただく心づもりをしていたのでありますがもはやかなわぬことになってしまいました。痛恨の限りであります。

ここに先生の御生前の御功績を偲び皆様と共に先生の御冥福をお祈りして追悼の言葉といたします。

先生の御功績に対しては，従三位勲一等端宝章が追贈されました。

（本誌毎号の表紙題字の「癌と人」は釜洞先生の揮毫されたものであります。）